【参考８】

国立競技場記念作品等の保存等の在り方について

平成 25 年 9 月

国立競技場記念作品等保存等
検討委員会

１．　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.1

２．　記念作品等について・・・・・・・・・・・・・・・・・p.1

３．　記念作品等の芸術的価値等について

（１）モザイクタイル壁画・彫刻・・・・・・・・・・・・・p.2

（２）銘板、炬火台（聖火台）・・・・・・・・・・・・・・・p.6

４．　保存・活用等について・・・・・・・・・・・・・・・・p.7

５．　参　考

（１）作品の経歴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.11～28

（２）作者のprofile・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.29～53

１．　はじめに

本検討委員会は、平成 31 年度のラグビーワールドカップ及び平成 32 年度に開催されるオリンピック・パラリンピック競技大会のメイン会場とするために、現在の国立霞ヶ丘競技場（国立競技場）を取り壊し、新しい国立競技場を建設する予定である。

現在の国立競技場は、戦災からの復興の象徴といわれた昭和３９年東京オリンピック競技大会のメイン会場であり、日本国民のシンボルで様々な思いが詰まっており、多くの記念作品等が存在する。

本委員会では、国立競技場の解体に伴い、特に壁画等の文化的価値を検討し、新しい国立競技場の整備に向け、保存等の在り方について検討してきた。

２．　記念作品等について

本委員会で検討する記念品等については、特に建物等と一体となった以下の２５点について検討を行った。

個々で検討する記念品等については、モザイクタイル壁画、彫刻等の文化的価値を有するものと、国際競技大会の銘板や炬火台（聖火台）等　スポーツ大会の歴史となるものに大きく区分できる。

３．　記念作品等の芸術的価値について

（１） モザイクタイル壁画、彫刻について

国立競技場に既存する１２点のモザイク壁画（ガラスモザイクおよびタイルモザイク）の原画制作者は、長谷川路可、宮本三郎、脇田和、寺田竹雄、大沢昌助であり、戦中・戦後の日本を代表する著名な画家達で、前述した５名の壁画原作者は、日本各地の国・公立美術館に作品が収蔵され、宮本三郎、脇田和は個人美術館もあり、文化功労者、勲章受章者、日本芸術院会員等、文字通り我が国を代表する画家達である。

作品の特徴としては、長谷川路可、宮本三郎は具象絵画、脇田和は具象・半具象であり、寺田竹雄、大沢昌助は抽象絵画を得意とする日本のモダニズムを代表するものであり、国立競技場の壁画は各人の制作スタイルが反映されたものであるといえる。

また、作品サイズのスケールからも他に類を見ない希有な作品群である。

国立競技場に現存する壁画は経年劣化による損傷もあるが、ほとんどは半世紀経った今でも良好な状態で残っている。これらのモザイク壁画は、昭和３９年（１９６４年）の東京オリンピック開催

に向けて、日本の芸術を世界に示す意気込みで制作したもので、企業からの寄付金を基に、国産の材料を使用し、日本人の技術を駆使して完成させたものであり、当時のモザイク壁画制作に携わった人達の意気込みが表れており、それは作品のダイナミックで力強い表現からも感じ取ることができるものである。

壁画の資産価値の面から捉えると、国内における絵画作品の価額からいえば、宮本三郎は（F10号、53cm×45.5cm：3,500,000円）であり、他の４名もこれに準ずる価格が想定され、国立競技場の各壁画（縦・横、3.5～8m）の総合的な資産価値は計り知れないと考えられ、これらの作品は、我が国にとって、大きな美術資産といえる。

戦後再開された夏期オリンピックは昭和３５年（１９６０年）にローマ、昭和３９年（１９６４年）には東京オリンピックが開催された。

ローマオリンピックのメインスタジアムとして使われた一帯はフォロ・イタリコと呼ばれる地域であり、広大な広場全域に大理石による床舗モザイクが施され、屋内水泳競技場内壁には水泳や陸上競技をテーマとするモザイク壁画が、屋外陸上競技場にはイタリア各都市を象徴する大理石像が立ち並ぶ（※１）。さながらフォロ・イタリコは、ギリシャ・ローマ時代の荘厳な遺跡の佇まいの感がある。

この地域はネオ・クラッシズムの流れを汲む近代建築群として歴史的文化財に位置づけられ、観光名所にもなっている。

ローマの次の五輪開催都市となった東京は、ローマに引けを取らない美術的要素が求められたことは間違いなく、メインスタジアムを彩るように、当時の実力ある作家達を総動員して壁画を制作したことが伺える。

では、これらのモザイク壁画や彫刻群が、なぜオリンピック競技施設に合体しているかという点であるが、それはオリンピック発祥の地ギリシャを象徴する美術であることが、理由である。

古代オリンピアの象徴ともいえるこれらの美術を継承することは、同じ歴史の系譜上にあることを示唆するものであり、「オリンピア＝人類の平和」を美術とスポーツで具現しているものである。

従って、国立競技場は、ローマオリンピック施設と同じ意味を持つ施設であると定義づけることができる。

次に、美術史の視点からモザイク壁画と彫刻について考察すると、ギリシャ時代、特に古典期からヘレニズム期に制作された極めて写実的なモザイクや彫刻は、その後、ギリシャを征服したローマ人達によって受け継がれ、芸術のお手本として数多くの模刻作品や模写作品が作り出された。

如何にローマ人達がギリシャ文化に憧れ、愛好していたかは、ローマ時代の著作物『プリニウスの博物誌』に詳しく書かれている。ローマ時代の諸都市ではおびただしい数のモザイクや彫刻が作られ、都市を飾っている。美術史ではこの二つの時代の美術を合体させてギリシャ・ローマ美術と呼ぶが、イタリアルネッサンスでは、人類の真の姿と崇高な精神性をこれらギリシャ・ローマ美術から見いだし、新しい時代を切り開いたのである。

ルネッサンス以後もこの精神性は受け継がれ、近・現代の美術へと引き継がれてきた。このようにギリシャ発祥の美術が人類に与えた影響は計り知れないが、オリンピック競技による世界平和の希求も同様である。

東京オリンピック開催に向けて制作されたモザイク壁画は、いずれもスポーツと精神性、人類愛をテーマにしたもので、オリンピズムを意識しているものである。

美術の表現はその時代を反映し、変化するものである。戦後、平和な時代を迎えた日本が、高度経済成長を支える国民の元気な姿と伸びやかで初々しい感性がこれらのモザイク壁画から感じ取ることができる。

制作者の一人である長谷川路可は、東京美術学校で絵画を学んだ

後、フランス、ドイツへ留学し、古代メソポタミア文明～ギリシャを発祥とするフレスコ画、モザイクを学び、これらの壁画古典技法を我が国に広めた画家であり教育者である。

長谷川路可が制作したメインスタンドのモザイクは､岩城硝子(株)が開発した色ガラスを使用したものですが、これはイタリアで伝統的に作られるモザイク用色ガラス（ズマルト）を模した国産の材料で、ガラス表面は岩肌のような凹凸がありますが、この表情を得るために三浦半島海岸の岩盤を石膏で型取りして、それをガラスの鋳型にした。という逸話が残っています。

この色ガラスは現在製造されていませんが、美術材料史の観点からも貴重なものといえるでしょう。同材料で作られた作品は、他に２点ありますが、そのうちの１点（勝利の場：脇田和）は使用した接着剤の劣化が原因で剥離が進み、損傷が進んだ状態である。その他の作品は、全て国産の色タイルを使用したもので、一部に経年劣化による色の変色が見られますが、概して劣化の度合いは低く、壁画の状態は良好である。

（２） 銘板、炬火台（聖火台）について

これらについては、芸術的価値の判断を行うことにより保存の在

り方を検討するというよりは、日本のスポーツ文化、スポーツの歴史の面から考えるべきである。

これらは、国立競技場で行われてきた日本の国際的な競技大会の歴史となっているものであり、炬火台（聖火台）に代表されるように、存在そのものが東京オリンピックを表現するものでもあり、日本におけるスポーツの歴史を語るものとしては、いずれも貴重なものであると判断できる。

４．　保存・活用等について

モザイクタイル壁画及び彫刻品については、基本的には、一部分の保存ではなく全面を保存し、博物館や屋外展示等、新しい国立競技場においての利活用が望ましいと考える。

壁画の一部保存という方法もあるが、壁画とは全体が一つの表現となるものであり、好みの一部だけを残しても作品の意味は失われるものである。

世界各地の博物館で展示される作品の断片は、偶然にその部分だけが残った遺物であるか、破壊して運び込まれたもののどちらかである。例えば中央アジアの仏教壁画の断片は、壁から剥がし取られたものが展示されているが、破壊行為の結果、現存するオリジナル

の壁画（構図や色彩、説話を表す本来の意味）の表現力は失われ、作品としては大変悲惨な状態と評価されている。

ベルリンのペルガモン博物館やイスタンブール国立博物館、ルーブル美術館、大英博物館、等の展示品には、現地から壁ごと、或は建物ごと移築した巨大な展示物があり、見るものを圧倒し、歴史を伝えている。

本委員会では、技術的・予算的な観点からの検討は別途必要であると考えるが、基本的な考え方としては、壁画や彫刻、聖火台、彫像、優勝者銘板等、検討している２５点については、東京オリンピック等の歴史を顕彰し、永久に開催都市の誇りを記憶にとどめる空間として博物館の役割を担い、観光や教育資産としても活用することがふさわしいとまとめる。

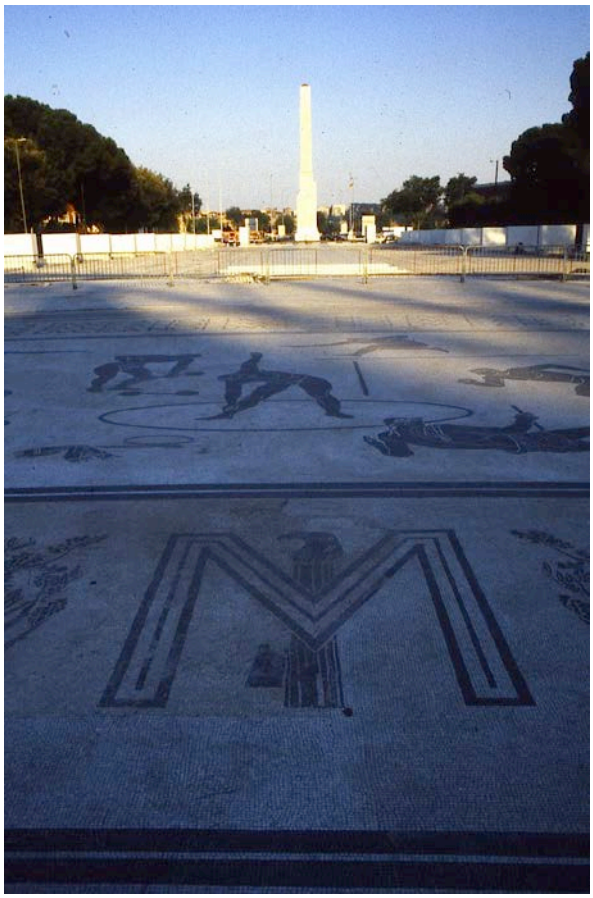
なお、現国立競技場の解体前に現状を高精細画像で保存する等の措置をとることは必須である。

※１　ローマオリンピック　メインスタジアムのあるフォロ・イタリコ地域のモザイク壁画と大理石像

競技を描いた舗床モザイク

噴水のモザイク

陸上競技場　彫刻



舗床モザイクとモニュメント

屋内水泳競技場モザイク壁画

５．参考

（１）作品の経歴

①炬火台（聖火台）（バックスタンド中央）

◆外寸
高さ：2.1m
直径（最大）：　2.1m
重量：2t
◆設置年　１９５８年
◆作者　鈴木万之助

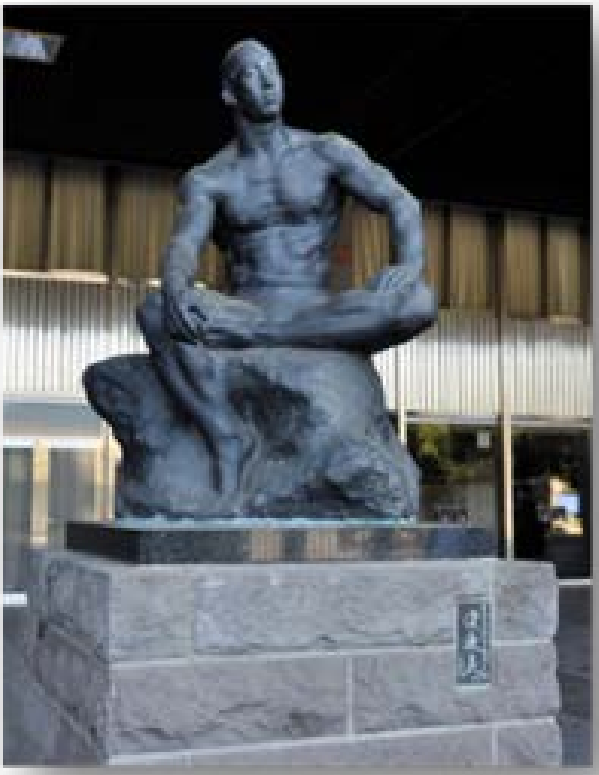
昭和 33 年、国立競技場を建設する際、聖火台の設計は、国立競技場の設計者角田栄ほか 4 名によって行われ、制作は川口内燃鋳造所が担当した。鋳造所は、美術鋳造の名工である鈴木万之助氏（当時 68 歳）に依頼した。

しかし、摂氏 1400 度の溶けた鋳鉄を鋳型に流し込む湯つぎ作業で鋳型は大破し、第 1 回の鋳造は失敗となる。万之助氏はその夜から 8 日目に他界する。

この仕事を引き継いだのが、その息子たちである鋳造師 3 兄弟である。

三男文吾氏は亡くなるまでこの聖火台を毎年磨き上げに来場した。

②健康美（正面玄関に向かって左）



◆サイズ
高さ：3m
◆設置年　１９６４年
◆作者　北村西望
◆寄贈者
全国高等学校体育連盟

作者は 30 歳の時、「自分は天才ではないのだから人が 5 年でやることを自分は 10 年かけても、やらなければならないのだ」と語っている。
長崎にある「平和祈念像」は、彼の代表作のひとつである。

③青年像（正面玄関に向かって右）

◆サイズ　　高さ：4m
◆設置年　１９６４年
◆作者　朝倉文夫
◆寄贈者
　東洋レーヨン株式会社

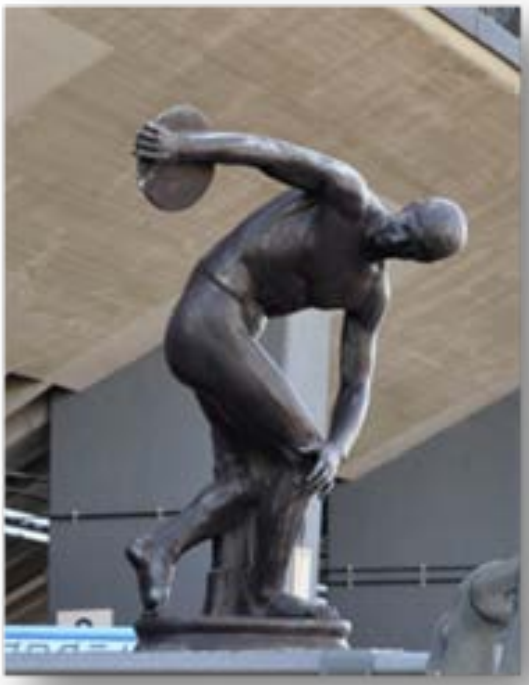
1956 年の作品。
動物（特に猫）の作品も多いが、躍動感溢れるスポーツマンの人物像の作品も多く手掛けており、明治、大正、昭和を通じ、日本の彫塑界を先導した芸術家である。

④波（千駄ヶ谷門入り右）

◆サイズ　高さ：4m
◆設置年　１９５９年
◆作者　吉田三郎

大正から昭和にかけて、日本彫刻界の重鎮として活躍した作家。
徹底した写実態度を示している。作風は、常に堅実で、男性像に傑作が多い。

⑤円盤投げ像（千駄ヶ谷門入り左）



◆サイズ
　高さ：2.8m
◆設置年　１９６４年
◆作者　ミロン
◆寄贈者
　サンケイ新聞社その他

　1964 年 1 月に「オリンピック 1964 年展」を西武百貨店で開催した時、ローマ国立博物館より取り寄せた実物の型抜き。円盤投げの像。
　9 月 4 日に除幕式開催

⑥槍投げ像（マラソン門入り左）

◆サイズ
　高さ：3.4m
◆設置年　１９５９年
◆作者　雨宮治郎

　大正・昭和に活躍した作家で、この「槍投げ像」は第 15 回帝展（1930 年・昭和 5 年）の特選となった作品である。
槍の鉾先は、国立競技場に向かっている。

⑦御者像（スポーツ博物館入口脇）

◆サイズ
　高さ：2.5m
◆作者　ファルピ・ビニョーリ

　第 11 回オリンピックベルリン大会（1936 年）で行われた芸術競技で金メダルを受賞した作品。
　古代オリンピックで行われていた馬車競技の一頭だて馬車を操る御者をモチーフとしている。

⑧　無題（代々木門入り右）

◆サイズ
　高さ：3m　幅：1.5m　厚さ：0.6m
◆作者
　　三井　泉
◆大理石の種類
　　本体は乳白色大理石、
　　台石は黒御影石

　作者は1971年ミケランジェロ国際コンテスト金賞受賞をはじめ数々の賞を受賞している。
　大理石を使用し、水泳のグロービングスタートをオブジェ化したもので、くりぬかれた部分にも女子選手の立像が見える。

⑨東京オリンピック大会　優勝者銘盤（正面玄関上外壁）

◆ サイズ　縦：2m　横：54m

1965 年 6 月 23 日に除幕式開催
徳島県特産の黒御影石（縦 2m×横 1m）を 54 枚並べて彫刻し、東京オリンピック大会優勝者をたたえている。

⑩1967 年ユニバーシアード東京大会　優勝者銘盤（代々木門入り左）

◆サイズ
高さ：2.5m　幅：6m
◆作者
中山克己

この記念碑は、各競技大会の優勝者をたたえ、優勝者名を刻印してあり、日本での大会を記念して屏風型をしている。

⑪1991 年第 3 回世界陸上競技選手権大会　優勝者銘盤（南入場口に向かい左）

◆ サイズ　縦：2.76m　横：5.14m

第 3 回世界陸上で 3 種目に 4 つの世界記録誕生という成果を記念して作成された。

男女 44 種目の金メダリスト名が刻まれ、翌年 1992 年 3 月 25 日に除幕式が行われた。

＜主な刻印＞

男子 100m　カール・ルイス（9 秒 86）
走り幅跳び　マイク・パウエル（8m95）
4×400m リレー　米国チーム世界記録
男子マラソン　谷口　浩美
女子マラソン銀メダリスト　山下　佐知子

⑫出陣学徒の碑（マラソン門入り左）

◆サイズ　高さ：3m

昭和 18 年（1943 年）10 月 2 日特例公布に伴い、全国の大学、高等学校、高等専門学校の文科系学徒の徴兵猶予が停止され、約 10 万人の学徒が戦場へ赴くこととなった。

10 月 21 日、元・明治神宮外苑競技場（現・国立競技場）では、東京周辺 77 校が参加して「出陣学徒壮行会」が折からの秋雨をついて挙行された。

学徒出陣五十周年を迎えるにあたり、歴史的事実を伝え、永遠の平和を祈念するため建立。平成 5 年 10 月 20 日竣工

毎年 10 月 21 日前後に碑前にて集会を実施したが、平成 15 年で終了。

⑬野見宿禰像
（メインスタンド向かって左）

⑭勝利の女神像
（メインスタンド向かって右）

◆サイズ　高さ 4m

◆作者　長谷川　路可

◆寄贈　旭硝子株式会社

＜作者の言葉＞
　向かって右側の塔には、栄光を意味するギリシャの女神が橄欖（かんらん＝オリーブと訳すことがあるが別種類）と月桂冠を持つ高さ 4m の立像があり、「美の象徴」とした。
　左側には、国技と呼ばれる相撲の元祖、野見宿禰（のみのすくね）で「力の象徴」とした。右側の像と同じ大きさである。
　白と黒のモザイクをもって端的に表現し、白の部分には淡色の色ガラスを混入してそれぞれのニュアンスを試みた。

⑮よろこび（正面玄関の右脇壁面）

◆ サイズ　高さ 6.2m　幅 3.6m
◆ 作者　寺田　竹雄
◆ 寄贈　旭光学工業株式会社

＜作者の言葉＞
　玄関入口なので、明るくはあるが派手すぎないようにガラスモザイクを使用した。
　寄贈者がカメラ会社なので、カメラのレンズの形をある程度取り入れてデザインした。

⑯より高く

◆サイズ
高さ：8.3m　幅：7.85m
◆作者
宮本三郎（二紀会々員）

⑰より速く

◆サイズ
高さ：3.72m　幅：8.3m
◆作者
宮本三郎（二紀会々員）

＜作者の言葉＞
　昔からの、公共の建物を飾る壁画や彫刻は、大体にその建物の使用目的に添った主題で制作されてきています。ここではやはりスポーツを主題としましたが、ただ小さな原図から拡大して施工されるモザイクの仕事だから、あまり困難を伴う細部分な手法は避けるようにした。主にスポーツの持つ力感や速度間といったものを強調したいと考えました。

⑱動態

◆サイズ
高さ：7.75m　幅：8.3m
◆作者
大沢　昌助（二科会々員）

⑲人と太陽

◆サイズ
高さ：3.5m　幅：8.3m
◆作者
大沢　昌助（二科会々員）

＜作者の言葉＞
壁面は外部の光線をさえぎる裏面、場所が大きいので細かい仕上げは効果が無い。材料はタイルモザイックというのが作者に与えられた条件であった。暗い壁面のために明るい色のタイルを選んだ。細かい効果をさけて、大まかな構成にした。タイルの材料をなるべく生かすように、目地の線を通すようにした。他の人の作品と調子が狂わないように心を配った。

⑳勝利の場

◆サイズ
高さ：7.75m　幅：8.3m
◆作者
脇田　和（新制作派会員）

＜作者の言葉＞国立競技場は、若人達が集い技を競い合い勝利を得る場所として、スポーツのメッカとしていつまでも記念されるべきである。トラックの形と月桂冠をあしらい、記念碑としての壁画にした。

㉑飛転

◆サイズ
高さ：3.5m　幅：8.3m
◆作者
脇田　和（新制作派会員）

＜作者の言葉＞
幾何学的な表現であるが、オリンピックを機会として日本の翼が強く、大きく羽ばたき、飛天して、総てが好転するという意味をあらわしました。

㉒勝利

◆サイズ
高さ：3.72m　幅：7.85m

◆作者
寺田　竹雄（二科会々員）

＜作者の言葉＞
英語の VICTORY を取り入れ、勝利の喜びを示そうとした。

㉓躍動

◆サイズ
高さ：8.03m　幅：7.85m

◆作者
脇田　和（新制作派会員）

＜作者の言葉＞
躍り動く二人、その間に月桂冠を頭に可愛い天使と世界を結ぶ国々の旗とともに、美と力の祭典をおこなっている。

㉔躍進

◆サイズ
高さ：8.03m　幅：7.85m

◆作者
寺田　竹雄（二科会々員）

＜作者の言葉＞
テーマは場所がら、スポーツに関するものとし、その扱い方は具体的なものより抽象的傾向のものを選ぶことにした。短期間の制作なので、施工者は美校出身のアルバイト学生を述べ二千人余りも動員して完成した。「躍進」は若人の躍進を連想しながらデザインしたものである。

㉕友愛

◆サイズ
高さ：8.03m　幅：7.85m

◆作者
寺田　竹雄（二科会々員）

＜作者の言葉＞
各国又は国内のスポーツ競技者が集まるところだが、その集まりはあくまでも友愛がなくてはならない。

（２）作者の profile

◆長谷川 路可（はせがわ ろか、1897 年-1967 年）

日本画家、壁画家。日本におけるフレスコ・モザイク壁画のパイオニアとして知られる。

1897（明治30）年7月9日、神奈川県藤沢に生まれる。本名・竜三。中学時代にカトリックの洗礼を受ける。1921（大正10）年に東京美術学校を卒業して渡欧。パリ、ベルリンでフレスコ画の技法を習得し、1927（昭和2）年に帰国。翌年、松岡映丘（えいきゅう）主宰の新興大和絵（やまとえ）会に加わり、帝展出品のかたわら各地の建築装飾画を手がけ、壁画家として知られる。1950（昭和25）年イタリアに赴き、チビタベッキア市の日本二十六聖殉教者教会壁画制作に従事。1957（昭和32）年の帰国後も意欲的な制作を続け、国立霞ヶ丘陸上競技場、長崎の日本二十六聖人記念館などに作品を残す。1958（昭和33）年、武蔵野美術学校本科芸能デザイン科講師となった路可は、1960（昭和35）年、油絵科などの学生にも呼びかけて「壁画集団F.M.」を結成した。F.M.とはフレスコ、モザイクを意味する。以後の壁画制作のほとんどは「壁画集団F.M.」の学生を指導しながらの共同制作となった。現在、フレスコ、モザイクの分野で活躍する画家の多くがここから育っていった。フレスコ、モザイクは、千

年以上の耐久性を持つ技法であるが、既に遺失してしまった作品が相当数にのぼる。戦災は致し方ないにしても、建物解体によるものがかなり多い。1967（昭和42）年7月3日、70歳で逝去。

（略年譜）

・1916年 東京美術学校日本画科に入学。松岡映丘に師事。

・1921年 東京美術学校日本画科を卒業。渡欧（フランス、ドイツ）

・1951年 ピウス12世（ローマ教皇）に拝謁、同年、日本聖殉教者教会（チヴィタヴェッキア市、イタリア）の壁画制作に着手。

・1954年 10月 壁画完成、チヴィタヴェッキア市名誉市民。同年、ローマ・ウルバノ大学に『聖ザヴェリオ』と題するフレスコ壁画を制作、1957年8月帰国。

・1958年 岩国市庁舎にモザイク壁画制作。

・1959年 古屋旅館大浴場（熱海市）。『星座の神話』（フレスコ・建物解体により遺失）

・1960年 武蔵野美術大学３号館（東京、武蔵野市）。『題名不詳（壁画集団F.M.練習用習作）』（フレスコ・現存）

・1961年 早稲田大学33号館1階エレベータホール床（東京、新宿区）。『杜のモザイク』（モザイク・建物解体により新校舎に移設計画）

・1962年 船橋ヘルスセンターホテル（船橋市）。『人魚』（フレスコ・建物解体により遺失）、『四季のモザイク』（モザイク・建物解体により遺失）

・1963年 東松山カントリークラブ（東松山市）。『彩雲』（モザイク・建物解体により遺失）

・1963年 日生劇場（東京、千代田区）ピロティ床。『大理石モザイク』（モザイク・現存）

・1964年 国立霞ヶ丘陸上競技場正面玄関床（東京、新宿区）。『悠久（宇宙）』（モザイク・ケーブル増設工事により遺失）

・1964年 国立霞ヶ丘陸上競技場メインスタンドエレベーター棟（東京、新宿区）。『栄光』『勝利』（モザイク・現存）

・1964年 大成化学相模原中央研究所（相模原市）。『幽玄』（モザイク・建物解体により遺失）

・1964年 国際仏教会館（浜松市鴨江寺）。『樹林図』（フレスコ・現存）

・1964年 シャンソンビル（静岡市）。『香の華』（フレスコ・損傷により遺失）

・1965年 日本美術家連盟理事となる。同年、日本二十六聖人記念館（長崎市）に『ザヴィエル像』（フレスコ）制作。 同年、 パウロ6世（ローマ教皇）に招聘され渡伊。同教皇に拝謁。

・1967年 日本二十六聖人記念館（長崎市）。『長崎への道』（フレスコ・現存）

・1967年 没。

没後、従五位勲四等に叙され、「旭日小綬章」追贈。

◆**宮本 三郎**（みやもと さぶろう、1905年-1974年）

洋画家。

1905（明治38）年5月23日、石川県能美郡末佐美村（現・小松市）に生まれる。1920（大正9）年上京して川端画学校に入り、藤島武二の指導を受ける。のち安井曽太郎に師事し、1927（昭和2）年から二科展に毎回出品、1936（昭和11）年二科会の会員となる。1938～1939年パリのアカデミー・ランソンに学ぶほか、ヨーロッパ各地を巡遊。1942（昭和17）年太平洋戦争下の南方へ従軍して戦争画『山下・パ

ーシバル両司令官会見図』を制作、翌年帝国芸術院賞を受ける。1944（昭和19）年朝日文化賞を受賞。第二次世界大戦後、1947（昭和22）年同志と二紀会を創立し、のち理事長となる。1966（昭和41）年日本芸術院会員。晩年には『妻と私』のほか、的確な写実力と華麗な色彩による舞妓（まいこ）、裸婦の連作で注目された。油絵の他に雑誌の挿絵、新聞小説の挿絵も多く手がけ、国立霞ヶ丘陸上競技場の壁画や切手の原画などで知られ晩年には木版画の作品も手がけている。1974（昭和49）年10月13日、69歳で逝去。

1980（昭和55）年には生地の小松市松崎町に宮本三郎記念美術館が開館。2000（平成12）年同市小馬出町（こんまでまち）に市立宮本三郎美術館が開館、記念美術館はその分館宮本三郎ふるさと館として2001（平成13）年に新たに開館した。

（略年譜）

・1922年 上京し、川端画学校洋画部で藤島武二に師事。

・1927年 「白き壺の花」で二科展に初入選

・1934年 初の個展を開く。

・1936年 二科会会員に推挙される。

・1938年 渡欧。

・1939年 第二次世界大戦の勃発に伴い帰国。

・1940年 陸軍省嘱託として小磯良平等と共に中国へ従軍。

・1942年 「山下、パーシバル両司令官会見図」で帝国美術院賞受賞。

・1943年 「海軍落下傘部隊メナド奇襲」で朝日賞受賞。

・1964年 国立霞ヶ丘陸上競技場（東京、新宿区）回廊に『より高く』

『より早く』を制作。（モザイク・現存）

・1946年 金沢美術工芸専門学校講師に就任。

・1947年 熊谷守一、栗原信、黒田重太郎、田村孝之介、中川紀元、

鍋井克之、正宗得三郎、横井礼市と共に第二紀会を結成。

・1955年 東京教育大学非常勤講師に就任。

・1966年 芸術院会員となる。

・1971年 金沢美術工芸大学名誉教授に就任。

・1974年 没。

◆**脇田 和**（わきた かず、1908 年-2005 年）

洋画家。新制作協会創立会員。

東京に生まれる。1923（大正12）年ドイツに渡り、1930（昭和5）年ベルリン国立美術学校を卒業して帰国する。光風会展、帝展に出品。1935（昭和10）年国家主導の帝展改組に反対して設立された第

二部会展に出品、特選と昭和洋画奨励賞を受けるが、翌年同志と帝展を完全に離れて新制作派協会を結成。以後生涯にわたり、同会の中心として出品を続けた。1955（昭和30）年日本国際美術展で最優秀賞、翌年第7回毎日美術賞と第1回グッゲンハイム賞国際美術展国内賞を受ける。ベネチアやサン・パウロのビエンナーレ展ほか海外展に出品、しばしば外遊する。東京芸術大学教授として後進を指導。またモザイク壁画の制作でも活躍。1986（昭和61）年4～8月、脇田和展が神奈川と群馬の県立近代美術館で開催される。1991（平成3）年には長野県軽井沢（かるいざわ）町に脇田美術館が開館した。同年勲四等旭日小綬章（きょくじつしょうじゅしょう）受章。身近で親しいモチーフがよく馴化（じゅんか）された脇田絵画は、比類なく豊潤な交響詩的パラダイスを思わせる。1998（平成10）年文化功労者となった。2005（平成17）年11月27日、97歳で逝去。

（略年譜）

・1908年 東京都港区青山に生まれる。

・1923年 青山学院中等部中退。

・青山学院中等部中退後、ドイツに渡りベルリン国立美術学校に入学、人体デッサン、遠近法、木口版画、七宝等絵画に関するさまざ

まな技法を学ぶ。同校卒業時（1930年）に美術学校より金メダルを受賞する。

・1932年 太平洋画会に入選し、翌年には帝展に入選する。

・1936年 新制作派協会（現在の新制作協会）の結成に加わり、以後同協会展に出品を重ねる。

・1955年 日本国際美術展で最優秀賞。

・1956年 グッケンハイム国際美術展国内賞を受賞。

・1964年 東京芸術大学助教授となり、1970年まで同校で教授を務める。

・1964年 国立霞ヶ丘陸上競技場（東京、新宿区）回廊に『勝利の場』『飛天』『躍動』を制作。（モザイク・現存）

・1991年 軽井沢に脇田美術館開館。勲四等旭日小綬章。

・1998年 文化功労者。

・2005年 没。

◆**寺田 竹雄**（てらだ たけお、1908年-1993年）

洋画家。日本芸術院会員。

1908（明治41）年4月27日、福岡県糸島郡北崎村畠中（現・福岡市西区宮浦）に生まれる。1922（大正11）年渡米。1935（昭和10）年帰国後は二科展に出品。1959（昭和34）年「朝の港」で芸術院賞。1990（平成2）年芸術院会員。裸婦や少女などを描いた。在米中より壁画も制作。裸婦、少女や現代風俗、風景画を得意とし、力強い構図の明快な画風を示した。一貫して逞しく生きる人々を主題として描いている。傍ら、国立競技場、三宅坂ビル、佐久市市庁舎、第百生命本社、松竹本社等にモザイク壁画を制作しいている。1993（平成5）年、9月10日、85歳で逝去。

（略年譜）

・ 1922年 福岡県立中学修猷館に進むが2年で中退し、14歳で渡米する。苦学しながら、カリフォルニア州のチコ・ハイスクールを卒業。

・ 1928年 カリフォルニア大学文学部に入学するが、同大学系のカリフォルニア美術専門学校（現・サンフランシスコ美術大学）に特等優待生として学ぶ。

・ 1931年 卒業後、アート・センター美術協会会員。

・ 1932年 サンフランシスコ美術協会会員。

・ 1933年 ロスアンゼルス美術協会会員。同年から翌年にかけて、米国政府の公共事業促進局（WPA）からの依頼で、サンフランシスコのコイトタワー内に、フレスコ壁画『野外スポーツ』を描く。

・ 1934年 カリフォルニア州壁画家協会の設立に会員として参加する。1935年 米国政府の依頼でカリフォルニア州サンタクララ郵便局内に壁画を制作し、同年10月帰国。

・ 1936年 第23回二科会展に『アメリカ風景』を出品し初入選。以後同展に出品を重ねる。

・ 1938年 第25回展に『見世物』、『建設』、『壁画試作』を出品して特待となる。

・ 1940年 二科会会友。1941年から1944年にかけて兵役に就く。

・ 1945年 二科会会員となる。

・ 1948年 第32回二科会展で会員努力賞を受賞（第38回展、第50回展同賞受賞）。

・ 1964年 国立霞ヶ丘陸上競技場（東京、新宿区）正面玄関右脇壁面に『よろこび』、競技場回廊に『勝利』『躍進』『友愛』を制作。

（モザイク・現存）

・ 1969年 第54回二科会展で『熱い国の女達』、『果物ワゴン』を出品して東郷青児賞を受賞。同年、アムステルダムにおける国際造型美術連盟に日本代表として出席。

・ 1974年 国際美術連盟日本委員長に就任するなど、美術家の国際交流にも尽力した。

・ 1976年 第61回二科会展で『アラビヤの女』が内閣総理大臣賞を受賞。サロン・ドートンヌ会員となる。

・ 1978年 二科会常務理事に就任する。

・ 1979年から10年に亘って、日本美術家連盟理事長を務める。

・ 1984年、第68回二科展出品作『朝の港』で日本芸術院賞を受賞。

・ 1990年 日本芸術院会員となる。

・ 1993年 没。

◆**大沢 昌助**（おおさわ しょうすけ、1903年-1997年）

洋画家。戦後二科会再建時の創立会員。

1903（明治36）年9月24日、東京三田綱町に生まれる。1928（昭和3）年に東京美術学校（現東京芸術大学）西洋絵画科を主席で卒業した後、西洋の古典美術に学びながら写実描写の時代が続く。やがて、西洋美術の伝統から解放され、60代を過ぎてからはそれまでの作品とまったく違う、具象・抽象を超越した色と形による造形詩を創り上げるが一つのスタイルに留まることなく、80歳を過ぎてソフトライン、水平線シリーズなど簡潔で色彩豊かな独自の抽象絵画を確立した。93歳まで精力的に発表を続けた。それらの作品は国立近代美術館はじめ、多数の美術館でコレクションされている。東京都庁に壁画がある。1997（平成9）年5月15日、94歳で逝去。

（略年譜）

・1923年 東京美術学校（現・東京芸術大学）西洋画科に入学。長原孝太郎、小林万吾にデッサンを学び、三年次に藤島武二教室に入る。

・1928年 東京美術学校西洋画科を首席で卒業。

・1933年 大沢昌助油絵個展（日動画廊）

・1939年 この年から児童雑誌『コドモノクニ』に童画を掲載。

・1942年 二科賞受賞。

・1943年 二科会会員に推挙。

・1945年 4月頃、強制疎開を受け、転居。二科会再建に会員として参加する。

・1946年 武井武雄、初山滋らによる日本童画会の創立に参加。

・1954年 多摩美術大学教授となる（1969年まで）。

・1961年 兜屋画廊で戦後初個展。

・1964年 国立霞ヶ丘陸上競技場（東京、新宿区）回廊に『動態』『人と太陽』を制作。（モザイク・現存）

・1965年 第4回国際形象展で愛知県美術館賞を受賞。多摩美術大学正面玄関にモザイク壁画を制作。第8回サンパウロ・ビエンナーレ展に出品。

・1981年 大沢昌助の世界展（池田二十世紀美術館）開催。

・1982年 二科会を退会。

・1984年 大沢昌助個展（銀座アートセンターホール）開催、「隠喩（赤）」「隠喩（青）」

・1991年 大沢昌助展（銀座、和光ホール）開催。9月、変身と変貌 大沢昌助展（練馬区立美術館）開催。東京都新都庁舎都議会本会議場前ロビーの大理石に壁面デザイン。

・1995年 第4回中村彝賞受賞。

・1997年 没。9月、追悼 大沢昌助展（練馬区立美術館）。

◆**北村　西望**（きたむら　せいぼう、1884-1987）

1884（明治17）年12月16日、長崎県南高来郡南有馬村（現・南島原市）に生まれる。本名・西望（にしも）。1903（明治36）年、京都市立美術工芸学校（現・京都市立芸術大学）に入学、同級生の建畠大夢と親交を結ぶ。同校卒業後、建畠とともに上京、東京美術学校（現・東京藝術大学）彫刻科塑造部に再入学し、白井雨山に師事する。1912（明治45）年に卒業し、同年兵役に入る。1915（大正4）年、兵役を除隊し本格的に彫刻の道に進むこととなり、第9回文展に≪怒涛≫を出品、最高の2等賞を受賞する。1917（大正6）年、建畠らと「八手会（やつでかい）」を結成、彫刻の研究にいそしむ。1921（大正10）年、東京美術学校の教授に任命、次いで1931（昭和6）年には京都市立美術工芸学校の教諭となり、後進の育成にも尽力した。文展の初期から昭和に至るまで活躍し、建畠や朝倉文夫と並んで「官展の三羽烏」と称された。1955（昭和30）年には、5年がかりで制作した大作≪長崎平和祈念像≫を完成させる。1958（昭和33）年、文化勲章を受章、文化功労者として顕彰される。1969（昭和44）年に

は紺綬褒章を受章。1987（昭和62）年3月4日、102歳で逝去。著書に『百歳のかたつむり』（日本経済新聞社、昭和58年）がある。明治末期から昭和にかけての長きにわたり、日本彫刻界を牽引してきた。

筋骨隆々とした迫力ある男性像を得意とし、代表作に前述の≪長崎平和祈念像≫のほか、彼の名を一躍知らしめることとなった≪光に打たれる悪魔≫1917（大正6）年、国会議事堂内の≪板垣退助像≫1938（昭和13）年などがある。

≪健康美≫は、1930（昭和5）年に原型が制作され、本作は東京オリンピックの前年、昭和38（1963）年に現在の場所に設置された。岩の上に堂々と構えて座る男性の裸体像で、鍛え抜かれた男性の肉体美を表現している。これは北村が一貫して取り組み続けたテーマであり、本作ではタイトル・作風ともに、彼が得意とするところがよく表れている。まさにスポーツの殿堂ともいえる国立競技場を飾るにふさわしい作品といえよう。ちなみに、同名のブロンズ像が、等々力緑地公園・井の頭公園などにも設置されている。

◆朝倉　文夫（あさくら　ふみお、1883年-1964年）

1883（明治16）年3月1日、渡辺家の三男として大分県直入郡竹田（現・豊後大野市）に生まれる。8歳の時に朝倉家の養子となる。1902

（明治35）年、19歳の時に中学を中退して上京、実兄・渡辺長男(おさお)の影響で彫刻家を目指すようになる。上京して1年後、東京美術学校（現・東京藝術大学）彫刻選科に入学。学生時代は「浜物」と呼ばれる輸出用動物置物の原型制作のアルバイトにいそしみ、在学中に1200体もの動物像を制作、彫刻の腕を研鑽した。1907（明治40）年3月に同校卒業、引き続き研究科に進学する。1908（明治41）年、25歳のときに第2回文展に≪闇≫を出品、最高の2等賞を受賞して文部省買上となり、新進気鋭の彫刻家として一躍世に知られるようになった。この第2回文展以後、7回連続で受賞を重ねる。1910（明治43）年、モチーフを客観的にとらえて制作した≪墓守≫が第4回文展で2等賞を受賞。なお、石膏原型は平成13（2001）年に重要文化財に指定されている（朝倉彫塑館所蔵）。1919（大正8）年から帝展審査員を務め、1921（大正10）年には東京美術学校教授に就任。同校在任中、関東大震災で破損したロダン≪青銅時代≫の石膏複製を修復している。また、1934（昭和9）年には谷中のアトリエを改築して朝倉彫塑塾とし、多くの子弟を育てた。1944（昭和19）年に帝室技芸員に任命、1948（昭和23）年には彫刻家として初めて文化勲章を受章した。1964（昭和39）年4月18日、81歳で逝去。

代表作は≪墓守≫≪大隈重信像≫1932（昭和7）年、≪三相≫1950（昭和25）年など。≪墓守≫以降、対象を徹底的に観察した写実的な作風を貫いた。また、大変な愛猫家としても知られ、≪吊るされた猫≫1909（明治42）年、≪よく獲たり≫1946（昭和21）年など、自宅で飼っていた猫の生き生きとした姿をとらえた作品も数多く残している。

本作≪青年の像≫は、1956（昭和31）年に制作、同年の第12回日展に出品された。現在の場所には、東京オリンピックの前年、1963（昭和38）年に設置された。男性の骨格や筋肉など、細部にいたるまで解剖学的にも正確につくられている。朝倉の高い技術力・観察力がいかんなく発揮された作品であるといえよう。

◆**雨宮　治郎**（あめのみや　じろう、1889年-1970年）

1889（明治22）年5月17日、茨城県水戸市に生まれる。1920（大正9）年、東京美術学校彫刻科本科卒業、1923（大正12）年、同校研究科修了。在学中の大正7（1918）年、第12回文展に≪落花≫が初入選する。1924（大正13）年、関東大震災復興美術展で妙技賞を受賞する。≪無人の境を行く≫≪槍投げ像≫と2年連続で帝展特選を受賞したことがきっかけで、1931（昭和6）年、同展審査員に就任し、以後、

帝展・文展・日展に出品を続け、各展審査員を歴任するようになる。1950（昭和25）年には日展参事、1958（昭和33）年には同展評議員、さらに1964（昭和39）年には理事を経て顧問に就任。1957（昭和32）年、≪健人≫（前年の第12回日展出品作）により日本芸術院賞を受賞、1964（昭和39）年には日本芸術院会員に就任する。1966（昭和41）年、日本彫塑会会長に就任。この間の1951（昭和26）年から1956（昭和31）年にかけて、東京学芸大学の教授に就任する。1967（昭和42）年、勲三等瑞宝章を受章。1970（昭和35）年5月13日、80歳で逝去。戦前から戦後にかけて、日本彫刻界の重鎮として活躍した。堅実な写実的作風で、肖像彫刻も数多く手掛けた。≪板谷波山先生像≫1965（昭和40）年、≪黒田清隆像≫1967（昭和42）年などがある。また、躍動する人体像を得意とし、彼の代表作とされる本作≪槍投げ像≫は1930（昭和5）年に制作され、同年の第11回帝展で2回目の特選を受賞した作品である。今まさに槍を投げんとする男性の裸体像で、迫力ある真に迫った表現である。大きくひねった身体の動きや筋肉の造形は、徹底した観察や解剖学的な知識抜きにはなし得なかったであろう。本作は国立競技場が誕生した1958（昭和33）年から、同敷地内に設置されている。石膏原型は、茨城県立近代美術館所蔵。

◆**吉田　三郎**（よしだ　さぶろう、1889年-1962年）

1889（明治22）年5月25日、石川県金沢市に生まれる。同郷の詩人・室生犀星とは幼馴染で、上京してからも交流があった。1903（明治36）年、石川県立工業学校（現・石川県立工業高等学校）窯業科に入学。そこで板谷波山と青木外吉の指導を受けることで、彫刻家を志すようになる。1912（明治45）年、東京美術学校（現・東京藝術大学）彫刻科を卒業、同期には北村西望や建畠大夢らがいた。卒業後は朝倉文夫が主宰する朝倉塾（後の朝倉彫塑塾）に学び、彫刻の技術を研鑽する。1918（大正7）年の第12回文展で≪潭≫が、そしてその翌年の第1回帝展では≪老坑夫≫がともに特選となり、大正11（1922）年、第4回帝展の審査員に推挙された。以後、22回にわたって帝展・新文展・日展の審査員を務める。1923（大正12）年、美術団体「白日会」を結成。1931（昭和6）年、文部省の命により一年間、フランス、イタリア、北米に留学し、古代彫刻を研究した。1935（昭和10）年、多摩美術短期大学彫刻科教授に就任。1943（昭和18）年には日本美術工芸及工芸会理事を務める。1950（昭和25）年、日本美術院賞を受賞。1954（昭和29）年、第2回アジア芸術オリンピック

代表として、フィリピン・マニラに赴いた。1955（昭和30）年、日本芸術院会員となる。1962（昭和37）年3月16日、逝去。

板谷波山や朝倉文夫らの影響を受けた徹底した写実と、ロダンやムニエなど、人間の内面性を表現する西洋彫刻の要素も取り入れ、独自の作風を展開した。とりわけ筋骨逞しい男性像や動物像を得意とし、代表作として≪山羊を飼う男≫1943（昭和18）年、≪男立像≫1949（昭和24）年などが挙げられる。

吉田が65歳の時に制作した本作≪波≫は、男性の裸体をくの字に大きく反らせ、手足をぴんと伸ばした独特のポーズが印象的である。自然写実的な作風で知られる吉田であるが、本作はまるで抽象彫刻を思わせるほどシンプルな構成で、彼の作品の中では異色ともいえる。晩年の作とは思えないほどの革新的で大胆な造形には、人体の動きによって人間の内面性を表現しようとしたロダンの影響が少なからずみてとれる。人間の溌剌とした健康美やしなやかさ、そして生命感に満ち溢れた作品である。

◆三井　泉（みつい　せん、1939年-　）

1939（昭和14）年、埼玉県川口市に生まれる。1957（昭和32）年、川口市立育英高等学校卒業後、棟方志功に師事する。翌年より、家

業である三井諸機械鋳型工業を継ぐ。この頃から東京で個展を開催するようになる。1969（昭和44）年に家業を廃業、この年にイタリアへ渡り、以後、海外を拠点として国際的に活動を展開する。イタリアでは大理石の産出で有名な北部の町ピエトラ・サンタに在住し、そこでイサム・ノグチに師事し、石彫の技術を学ぶ。1976（昭和51）年よりハンガリー・ブタペストに工房を移してからはハンガリーを拠点に活動、公共彫刻を数多く手掛ける。日本国内の主な公共彫刻作品に、川口市立川口西公園内の≪AI間≫1995（平成7）年、港区赤坂区民センター内の≪ドリーミング≫1996（平成8）年などがある。

素材の質感を生かしたシンプルなフォルムと、その周囲の空間との「間」を生かした作品を多く手掛けている。本作≪無題≫も、水泳のスタートのポーズを抽象的に造形し、その中に人のシルエットが浮かび上がるよう、空間を作品の一部として取り込んでいる。

本作は、1976（昭和51）年に現在の場所に設置された。1968（昭和43）年、メキシコIOC総会での故ブランデージ会長の発案により、オリンピックの聖地ギリシャのオリンピアに各国から記念碑を寄贈することとなり、そのために制作されたものであったが、その後の総会で寄贈案が否決、東京オリンピックのメイン会場であった国立競技場に設置されることとなった。

◆**ミロン**（Myron, Μύρων、活動期：前460年頃-前430年頃）

紀元前5世紀、クラシック期と呼ばれる時期（前480~前323年）に活躍した、古代ギリシャの彫刻家。アッティカの北西部でボイオティアとの境界にあるエレウテライで生まれ、アテネで活動していたことが知られている。彼の作と判明できる作品に、本作≪円盤投げ≫をはじめ、≪ミノタウロス≫≪アテナイとマルシュアス≫などがある。

ミロンが活動していた頃から、オリンピア競技会の優勝者像が相次いで作られるようになった。つまり、運動競技者が美術作品によってはじめて表現されるようになったのが、この時代からということができる。

本作≪円盤投げ≫は、それらの競技者像の中でもとりわけ有名で、完成度の高い作品である。円盤を手放す直前の、緊迫感あふれる一瞬を見事に表現している。血管や肋骨の浮き上がりや筋肉の緊張、踏み込んだ右脚に入る力など、きわめて正確に人体の動きを表現している。しかしながら、現実の動作を完全に再現した像ではない。円盤を振り上げ、そして手放そうとする二つの動きを合体させているのである。現実を忠実に再現することよりも理想化された造形美

を目指した、この当時のギリシャ人の理念が、この像からもうかがうことができる。

この像の原作は紀元前450年頃に作られ、もとは青銅で作られていたが現存していない。しかし後年になって多くの模刻が作られ、それぞれ顔の向きや手足の角度など微妙に異なっている。本作は、原作にもっとも近いとされるローマ国立博物館所蔵のローマン・コピー（古代ローマ時代に作られた模刻）から鋳造されたものである。まさにオリンピックの原点を示すべく、国立競技場に置かれるにふさわしい作品であるといえよう。

◆**ファルピ・ビニョーリ**（Farpi Vignoli、1907年-1997年）

1907年8月21日、イタリア・ボローニャに生まれる。1919年、ボローニャの美術学校に進学し、彫刻家エンリコ・バルベリに師事、彼から絵画、彫刻、建築を学ぶ。卒業後の1934年にはボローニャで個展を開くようになる。1935年、ローマでの第2回カドリエンナーレ（4年に一度開催される芸術祭）に≪御者像≫を出品、2年後のベルリン・オリンピックに参加する権利を得る。この頃、テニスや高跳びの選手など、スポーツを題材にした彫刻作品をいくつか制作し、選手の躍動感を表現し続けてきた。

第5回ストックホルム大会（1912年）から第14回ロンドン大会（1948年）までの近代オリンピックには、スポーツ競技とともに芸術競技があった。種目は絵画、彫刻、文学、建築、音楽などがあり、スポーツを題材にした芸術作品を制作し、採点により順位を競うものであった。1936年、彼は本作≪御者像≫にて第11回ベルリン・オリンピックの彫塑部門で金メダルを獲得した。この作品は、古代オリンピックで行われていた馬車競技の一頭立て馬車を操る御者をモチーフとしており、綱を引く腕や大きく広げて踏ん張る脚に、競技者の力強さが表れている。

しかしその後、ビニョーリはスポーツを主題にした作品の制作をやめ、巨大なレリーフの制作などに取りかかるようになる。

戦後は学生時代から好んでいた水彩画を描いていたが、1950年に彫刻の制作を再開、肖像彫刻や墓碑、モニュメントなど、精力的に活動するようになる。1997年11月、逝去。

◆中山　克己　なかやま　かつみ

　一級建築士事務所有限会社シーアンドシーエンジニアリング代表取締役 一級建築士。 日本大学理工学部建築学科卒業。元鹿島建設株式会社構造設計部長。 2003年一級建築士事務所有限会社シーア

ンドシーエンジニアリングを設立。 物流施設の構造設計に数多くの実績と、新工法の開発、構造設計及びコンサルティングに従事。

作品設置位置